

誰もが挑戦できる社会を

車いすの旅人 **木島英登さん** 講演

障害のある観光客の誘致や自然体験促進を目的とした研修会が紀北町便ノ山のキャンパスに木島英登さん講演のバリアフリー事情を知る第一人者木島英登代表(44)が「世界のいろんなバリアフリー・アクティビティの事例」と題して講演。県や周辺市町職員、観光業者ら27人が耳を傾けた。

木島さんは1973(昭和48)年大阪府生まれ。高校3年の時、ラグビー部の練習中に脊椎を損傷し、車いす生活に。1997(平成9)年に神戸大学発達科学部を卒業、広告会社を経てフリーランスとなり、2004年に木島英登バリアフリー研究所(大阪府豊中市)を設立した。車いすの旅人として世界157カ国を訪れ、現在は世界のバリアフリー事情を知る第一人者としてビジネスコンサルティングや講師、訪日外国人への情報提供、執筆業で活躍している。主な著書は「空飛ぶ車イス」「恋する車イス」「車いすの旅人が行く!」など。

活動は自分の意志で

バリアフリー 絶対必要なものを

摘し、「100パーセントの健常者、障害者はいない。誰もが当事者となって考え、どんな人でもやりたいことに挑戦できる社会をつくってほしい」と訴えた。

木島さんは大学1年の夏休みに語学研修で米国を訪れ、学校主催のピクニックに参加。講師のアドバイスにより「活動は『できる』『できない』で判断するのはなく、やりたいかどうかの自分の意志が大事」と気付かされたという。それ以来頻りに海外を旅し、ニューヨークやロンドンでバンジージャンプやサハラ砂漠でラクダ乗り、アルプスでスキー、レユニオン島でパラグライダーなどさまざまなアクティビティに挑戦。「HAPPYの語源はhappyn(起こる、生じる)から来ている。何か行動しないとハッピーは生まれない」と力を込めた。

どこに行ってもバリアフリー。野球場では観客席が取り外し可能で、客に合わせてカスマイズ(変更)でき、キャンプ場では全てのコテージで障害を取り除かれている」と一方「日本では映画館などで車いす専用席が増えたが、一般客と分けられてしまう事が多い。デートに行っても席がばらばらになってしまおう」と指摘。「専用席が必要な人もいるが、違う人もい



世界のバリアフリーアクティビティを紹介する木島英登さん(紀北町便ノ山のキャンパスに海山で)

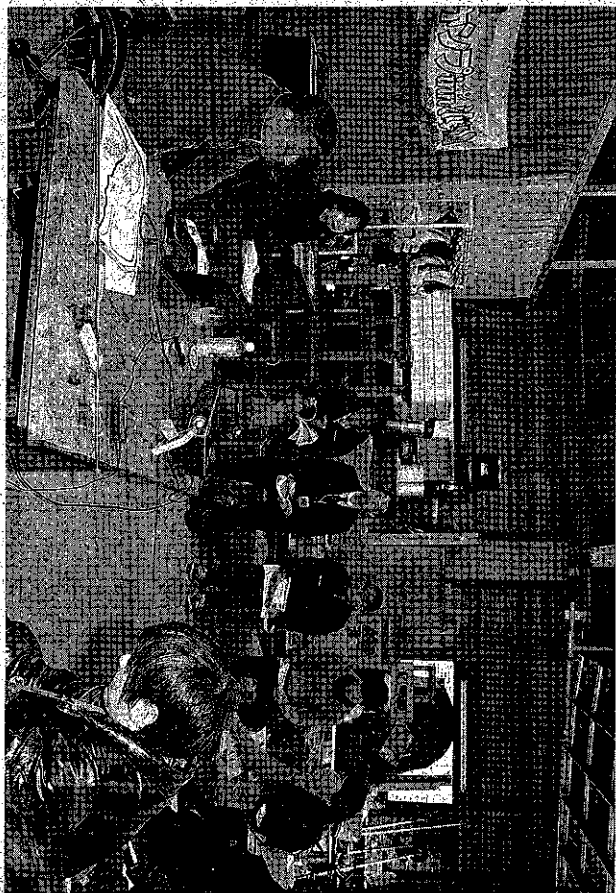
る。選択肢を作ってくることが豊かさにつながる」と述べた。また、建築費8億円をかけた北海道知床五湖の高架木道(800m)にも触れ、「車いすでも通れる道を作ってくれることはありがたいが、行政が行うと高コストになり、今回は1億造るのに100万円もかかっている。安全性を求めるがゆえ手すりの位置が高くなり、車いすから景色が見えない」と指摘した。

バリアフリーは障害の種類や度合い、その人によって評価が異なるとした上で、「全ての要望を満たそうとすると高額になり、敷居が高くなる。豪華なものはない。大切なのはそれぞれの要求に共通する核となる部分、絶対に必要なものを整備すること」と力を込めた。

研修会は県バリアフリー観光推進事業の一環で、NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター(中村元理事長)主催。この日は同センターの野口あゆみ事務局長(45)が活動内容や県内の事例を説明。キャンパス海山指定管理者NPO法人ふるさと企画舎の田上至理理事長(54)が施設を案内し、バリアフリーコテージや昨年3月に完成した銚子川のカヌー乗り場に向かうスロープを披露した。

「車いすの旅人に学ぶ 海外で体験したバリアフリー」

紀北町便入山にあるキヤンパイン海山の「勢志摩バリアフリーセン」で、バリアフリーの観光タラの野口あゆみ事務局長(46)が「今までは障がい者があるからと諦めてきた観光だが、行きたいと申し出てほしい」と語り、協賛職員、観光業者ら27人が参加した。



海外訪問の時の話を語る木島さん

主催したNPO法人伊の巻志が尊重される時代になってきている」と研究の主旨説明を行い、NPO法人らと企業舎の理事長で同キヤンパインの理事長の田上幸さん(54)がバリアフリーの取組みを説明。階段をスロープに改修したカヌー乗り場を見学した。

講演したのはNPO法人シヤパン・アクセシブル・ツリズム・センタルの理事長で、バリアフリー研究所代表の木島英登さん(44)。障書があるというだけで海外各国を訪ねた時の体験談を語り、海外で障書がある人に対する意識の違いを日本と比較した。

木島さんは大阪生まれ。高校3年生の時、ラグビーの練習中に背骨を折った。以来、車いすに よる生活を27年続けてお り、これまでに15カ国を訪問した。世界中を旅しながら、日本では同 NPO法人で訪日外国人へのバリアフリー旅行情報の提供などをしている。アメリカの大学にいた

時、大学のシステム利用を無料にしてもらうのに苦労した。どこも無料にしてもらうのに苦労が、日本ではホムニアスをしてもらった。障書者であらなくても、ホムニアスをしてもらう。日本では空車で車いすを押してもらった時、雑誌を避けるために「障書のある人が通るのぞい」をきいて言われる。

「日本での障書者への過保護な対応が行き過ぎる」と話した。「100%の障書者もいなし、100%の健常者もいなし」という国際ユニバーサルデザイン協議会前総裁の故郷に親王殿下の格言の一部を引用し、「どんな人でもやめたいことに挑戦できる社会になれば」と障書者と健常者の共生を訴えていた。